

身代わりの花嫁は
傷あり冷酷騎士に執愛される

プロローグ

大陸の南東部に位置するクレ斯顿王国。

安定した気候と肥沃な国土、それにいくつもの良質な港をもつこの国は、豊富な作物と貿易により栄え、文化の質も高い。おかげで大陸の華と呼ばれているが、その国力目当てに周辺の国々から虎視眈々と狙われていた。

過去には幾度もの侵略を受けたものの、そのたびに豊かな国力に裏打ちされた軍事力で撃退した上、近年は国王の巧みな外交手腕により、その頻度も下がり、国民は安堵している。平和を謳歌するクレ斯顿王国であるものの、そんな時代においても語り継がれる一つの戦いがあつた。

それは今から二十年と少し前のことだ。

その当時、王国の北に好戦的な国があつた。

そこは険しい山々が連なり、いくつもの少数民族が住まう場所だったが、ある時、それらを束ねる『英雄』が現れたのだ。

英雄は周囲の民族を次々に従え、その地で初めての統一国家を作り上げたのである。

そこまではいい——が、以前のよう農耕には向かない土地で遊牧の片手間に作るわずかな作物だけでは、とても一国を支えられない。

だとすれば、どうするか……当然、その英雄王は豊かな隣国であるクレストン王国に侵攻の手を伸ばした。

遊牧の民であつたその国人間は気性が荒く、戦闘ともなればすさまじい力を發揮する。

それを迎え撃つクレストン王国の軍も勿論よく訓練されてはいたが、機動力を駆使した英雄王の戦い方に苦戦を強いられた。

そんな中、最も激しい戦場となつたのが、王国の北に位置する辺境伯領である。

隣国との国境線を含むその地域はまさに最前線となり、幾日も激しい戦いが続いた。

王国中からの援軍を得ていたものの、攻勢は止まず、やがて指揮を執る辺境伯自身も深手を負い、一時は領都を落とされかけるほどとなる。北の守りである辺境伯領が落ちれば、その後は王国中が蹂躪されるのは明白だ。それだけは阻止せねばならぬと、傷を負いながらも命を賭して再び戦場に立つた辺境伯だつたが、劣勢は隠しようもない。

その時、彼の友人であつたある侯爵家の当主が、敵軍の囲みを突破しその隣に並び立つたのだ。命を惜しんでできることではない。

国のために——それ以上に、友の命を救うために武器をふるう姿とその友誼に力づけられ再び力を

得たクレストン王国軍は、激しい戦いの末に英雄王その人を打ち取つた。

その結果、旗印となる王を失つた軍勢は、それまでの勢いが嘘のように、散り散りに追われ北へ逃げ帰り、クレストン王国の危機は去つたのだ。

この功により、戦いに参加したすべての者たちに王家より褒賞が贈られた。

特に功のあつた辺境伯家も厚く報われたが、当主が最も感謝したのは王家ではなく、危機に駆け付けてくれた友人である。

その感謝をどう表せばいいか——話し合いの結果、二人の間で一つの約束事が取り交わされた。この友情を永遠のものとするために、互いの子孫を娶せよう、と。

ただ、残念なことにこの時、互いの家には釣り合いのとれる未婚の男女がおらず、その約束は次代に引き継がれることとなる。

その辺境伯の家名はラファーニュ。友人である侯爵家はマチスといつた。

「——わあっ！ それじゃ、お母様とお父様は、そんな昔から結婚のお約束をしていたの？」

「うららかな屋下がり。

気持ちの良い風の吹く庭園で、両親から聞く自分の曾祖父たちの武勇伝に目を輝かせていた子どもが、無邪気に尋ねる。

「そういうわけでは……いや、確かにそうかもしけんが……」

素直に肯定するには少々込み入った事情がある。が、それをまだ幼い我が子に話してもいいもの

だろうか。

困った顔になる夫に、妻は小さく笑いながら続けた。

「ふふっ。確かに、そうとも考えられるわね。けれど、本当のところ、お父様と初めてお会いした時はね……」

「ま、待て！ その話は、また今度にしようっ」

もう何年も前のことなのに、いまだにその頃の話をする、夫は冷や汗をかくようだ。

「ええ、どうして？ 聞きたいのにい」

「お父様がおっしゃっているのだから、我慢しなくてはね……ね？」

「……はーい」

好奇心旺盛な子に食い下がられ、母の威厳（？）をこめた笑顔で念押しする。

夫はそのことに感謝しつつ、自分の傍らで笑う妻と子を見て我が身の幸せをかみしめ、ふと過去の出来事に思いをはせた。

『あの頃』は、こんな幸せが自分に与えられるとは思つてもみなかつた、と。

第一章

「初めてお目にかかります。マチス侯爵が二女リリアン・レナ・マチスにございます。ラファード・辺境伯家ご子息ユーラー様の妻となるために参りました。不束者ではございますが、なにとぞよろしくお引き回しくださいますようお願ひいたします」

北の辺境にある城塞都市。その中央にある大きな屋敷は、使われている素材は上質なものだが、見た目は質素——というよりも質実剛健という言葉がよく似合う。

その来客用の応接室で、主一家に挨拶した女性は、見事なカーテンを披露しつつ深々と頭を下げた。

年の頃は一八、九あたりだろう。銀に輝く髪をいただく顔は瘦せて頬骨が浮き上がり、体も少しでも乱暴に触れれば折れてしまいそうなほど細い。身に附いているものも侯爵家の息女にしてはかなり慎ましやかだ。

それでもその口上は堂々としたものであり、立ち居振る舞いも今すぐ王の前に出しても恥ずかしくない出来栄えだった。

「リリアン殿……と言われたか？ マチス侯の一女であられるど？ 確かに我が息子とマチス侯のご息女とは、婚姻の約をしていたが……」

とはいへ、そう言われた相手は戸惑いを隠しきれない。なぜなら――

「はい。本来でありますれば、この場にいるのは皆様がご存じの姉のテレーズのはずでございました。ですが、お知らせいたしましたとおり姉の体に障りがおこりまして、こちらに嫁ぐことができなくなりました。そのため、父の命により、私が参りました」

「まあ……」

「なんと……」

彼女――リリアンの言葉に絶句したのは、この屋敷の主であるラファージュ辺境伯とその夫人だ。

突然のことで、さぞや驚かれたと存じます。本当に申し訳ありません

再度、深々と首を垂れるリリアンが心底申し訳なく思っているのがよくわかるため、ラファージュ辺境伯夫妻も彼女を責めようという気にはなれなかつた。

確かに婚姻の約をしていたのは、リリアンの姉である。

しかし、その姉の体に差しさわりができた。それがどのようなものかはわからないが、嫡子に嫁ぐのに不都合なものならば、代わりに妹を、というのは貴族としては理解できる話である。

ただ、そういう事情があつたとしても……

「本来であれば、我が父自らがこちらに伺い、事の次第をお詫びするのが筋です。ですが、あまりに急なことでございまして、その処理のために父は王都を離れられませんでした。早馬を走らせましたが、婚姻の日時が迫っていたこともあり、お返事を待たずに私がこちらにまかり越した次第でございます」

国内の有力な家同士が婚姻を結ぶには、王家の許可が必要だ。ラファージュ辺境伯家とマチス侯爵家の縁組も勿論、その許可を得ているが、あくまでそれはリリアンの姉が嫁ぐ前提。その花嫁が代わつたとなれば、新たな手続きが発生する。そのため、父親であるマチス侯が王都を離れられないというのもわかるものの……

「早馬など、着いてはおらぬ」

「え……？」

今度はリリアンが驚く番だつた。

「もらつておらぬ手紙に、返事など出せようはずもない」

「で、ですが、確かに父に命じられ、侯爵夫人――義母がこちらへ……」

そこまで言つて、彼女は絶句する。

その様子と『侯爵夫人』『義母』という言葉に、ラファージュ夫妻はマチス家に関するさして珍しくもない貴族の御家事情を思い出した。それを考へると、おおよその事情が理解できる。

「それでは、もしや……私がこちらに来ることになつた事情も……？」

「ああ。今、初めて聞いた」

「大変、申し訳ありません」

同じく状況を理解したリリアンの顔色が青を通り越して、白くなる。

それも当然。貴族の家に生まれたからには、政略結婚は当たり前。リリアンもそう教育されて育つてきた。

今回のマチス家とラファージュ家の件は通常の政略結婚とはいささか事情が異なるが、それでも家同士の約束事に違いはない。だからこそ、父から急な花嫁の代役を仰せつかつた時も、素直にその言葉に頷き、ここへ来た。

だが、それも花嫁の交代についての話はついているという前提で、だ。

それが、ふたを開けてみれば、自分の来訪はこちらの家族にとつてまさに寝耳に水だつたというのだから、青くなるなというほうが無理だろう。

リリアンが今更ながらに思い出すのは、先ほどこの屋敷を訪れた際のこと。侍女の一人も付き添わず、嫁入り道具を運んできたわけでもなく、文字通り身一つで——さすがに乗つてきた馬車は侯爵家のものであつたが、荷は先に運んであると信じきつていた彼女は、取り次いだ執事らしい男性に胡乱な顔をされたのだ。

その時は、前もつての顔合わせもできなかつたので驚かれていたのだろうと想えていたのだが、それどころの話ではない。

だが——ここで追い返されるわけにはいかなかつた。

『ラファージュ家とマチス家の縁組』は、祖父同士の約束事である以上に、そのいきさつが国内に広く知れ渡つている。

ここにきてマチス家の責により破談ということにでもなれば、生易しいスキヤンダルでは済まなかつた。

それがわかつてているからこそ、父も『土壤場になつての花嫁の交代』などという荒業を使つてま

で、自分をここによこしたのだ。

何より、自分にはもう『帰る家』はない。

ならば、今、リリアンが考えるべきは、いかにしてラファージュ家の面々の怒りを解くか、なのである。

そこで、一つの声が上がつた。

「……別に誰が妻になろうと、俺は構わん」

やや低めの、それでいてよく響く美声。

この時の室内には、入り口を背にして立つたリリアン、彼女に相対するラファージュ辺境伯夫妻、そして、もう一人が存在した。

その人物は、傍らにおかれた応接セットに座つたままで事の成り行きを見守つていたのだが、ここにきて初めて沈黙を破つたのである。

「ユーティ？」

彼の声に戸惑いの声を上げたのは、ラファージュ辺境伯だ。

「聞こえませんでしたか、父上？」

「いや。聞こえはしたが……」

「では、それでいいでしよう？」

そつけなく己の父に告げた男性は、物憂げに椅子から身を起こす。同時に、カツンと硬質な音がしたのは、彼が持つ杖のせいだ。

「——初めてお目にかかる。リリアン殿、と言われたか？」

カツンカツン……と杖の音を響かせて、その男性がリリアンの前に立った。

これまでリリアンが会話をしていたのはラファージュ夫妻であり、その最中によそ見をするのは失礼にあたる。なので、半ばその杖に体重をかけるようにして立つ男性を、リリアンはこの時初めて、仔細に観察できた。

「俺はユーテ・ルイ・ラファージュ。あなたの夫となる男だ」

皮肉っぽい口調で、先ほどの彼女の口上を真似る声は、やや低めだが耳に心地良い。

男性は背が高く、向かいあつたりリアンの視線が彼のあご辺りになり、目線を合わせるには意識して見上げる必要があつた。

その顔立ちは非常に端整で、先ほどまで話をしていたラファージュ辺境伯の面影があることからも、父親似なのだと推測される。

黒髪をやや長めに伸ばし、それが半ば顔にかかるついた。その下から覗く目は、まるで黒曜石のようだ。

だが、彼——ユーテを見た時に最も印象に残るのは、それらではなかつた。

黒曜石の輝きを放つ相貌そうちようの、その左には眉から目蓋まぶたを掠め、頬までつながる一直線の傷があつた。しうれい秀麗な顔立ちの中でひときわ異彩を放つそれに、リリアンの視線はとらわれる。

「……ああ、この傷が気になるか？」

「も、申し訳ありません」

淑女として、男性の顔をまじまじと見つめるなど無作法がすぎる。夫となる相手だが、まだ婚儀は挙げていないし、何よりこれが初対面だ。

慌てて己の非礼を詫びるリリアンだが、ユーテは小さく嗤わらつただけでその非礼をとがめなかつた。「構わん。気になるだろうから、もつとよく見るといい。顔に受けたのはこれだけだが、体にはもう少し傷があるし、この足も傷のせいだ。そつちは今は見せられんが、初夜の時にでも確認するといい」

「……本当に、それでいいのか、ユーテ？」

「いいも何も——俺も彼女も、爺様たちの醉狂の犠牲者です。俺は元から覚悟していたが、話を聞けば、こちらは降つてわいた話だつた様子だ。それでもけなげに文句も言わずに来てくれたのですから。それを責めるほど、俺は阿呆あほうではないつもりですよ」

「ユーテ……」

「そういうわけで、リリアン殿。どうやら俺と君は夫婦になるらしいので、リリアンと呼ばせてもらおうか。こんなポンコツな夫だが、我慢してくれ」

「い、いえつ！ そのような……」

口調も態度も皮肉っぽくはあるが、突然押し掛けた自分を責めることなく、それどころか庇かばつているともとれる言葉にリリアンは困惑する。

「……ユーテ、今はそのくらいになさい。それよりもリリアン様は、まだこちらに着いたばかりですよ？」

言いたいことを言い、あとは興味なさそうにそっぽを向くユーティーに対し、どう対処すれば良いのか戸惑うリリアンを見かねてか、辺境伯夫人が割って入る。

「母上」

「旅装を解いていただくどころか、お茶の一杯もさしあげていないので。貴方には貴婦人への気遣いをしつかりと教えたつもりでしたが、どこに落としてきたのですか？」

「それは、その……いや。確かにそうですね」

おつとりした口調ながらも厳しい母の言葉に、いつたんは反発しかけたユーティーであったが、すぐに思い直す。

「リリアン、こちらの気遣いが足りず申し訳ない。部屋に案内させるから、まずは一休みしてほしい」

「ユーティー、そこは、貴方自身が案内するべきですよ」

「い、いえ。そのようにお手を煩わせては……」

母子の会話を傍らで聞いていたリリアンだが、思わず方向に話が進みかけているのに気が付き、慌てて辞退する。が、その言葉が終わるよりも早く、再び夫人が口を開いた。

「リリアンさん。もう私の義娘になるのですから、リリアンさんと呼ばせていただくわ。初めての場所で妻が不安になつてはいたとしたら、まず率先して夫が気遣うべきです。妻を大切に扱うのは夫として当然のことですもの……そうですわよね、旦那様？」

「ああ、そのとおりだ」

いきなり矛先が辺境伯に向かつたが、そんな急な問い合わせにも鷹揚に微笑みながら頷く彼の姿から、この家の夫婦関係はとても良好なのだとリリアンは察した。

「そういうわけですから、ユーティー、案内を。それと、リリアンさんが落ち着いたのを確認したら、またこっちへ戻つてらっしゃいね。貴方には少々言い聞かせなければならぬことがあります」

「はい、母上」

ユーティーも母親には頭が上がらないらしい。

そんな家族の様子に自分の生家との差を感じ、リリアンの胸に小さな痛みが走る。けれど、そんな自分の心の動きを押し殺すのは、彼女にとつてはいつものことだった。

★★★

「君にはこの部屋を使つてもらう」

コツコツ……と杖の音を響かせたユーティーがリリアンを案内した場所は、屋敷の中でも奥まつた一角だった。

重厚な扉を押し開けて、一歩、中に入り……今まで見てきた落ち着いた感じの内装とは全く異なるそのたたずまいに、彼女は一瞬、目を見張る。

壁紙は薔薇をあしらつた華やかなもので、窓にかかるカーテンもそれに柄を合わせているらしい。調度品の類も武骨さが目立つ他の部屋とは異なり、緻密で繊細な彫刻を施されたものばかりだ。

全体の色調は赤、それに金の差し色。豪華というよりも、華美という表現がふさわしい。

「もしかすると、君の趣味とは違うかもしれないが、こちらとしては君の姉が来ると思っていたのでね。彼女の希望に沿った内装になつていてる」

そんなユーティの言葉で「ああ……」と納得した。

確かに、姉の好みそうな部屋だ。

「気に入らなければ変えればいい」

「いえ、大丈夫です」

リリアンの様子に何かを感じたのか、ユーティがそう提案してくるが、即座にそれは辞退した。

正直なところを言えば、こんなキラキラしい部屋では落ち着かない。が、これを変えるとなれば当たり前だが金がかかる。ただでさえ、侯爵家は『結婚直前での花嫁交代』というとんでもないことをしてかしているのだ。これ以上、辺境伯家に負担をかけるような真似はしたくなかった。

「そうか？ まあ、いい。君の世話をする者がもうすぐ来る。着替えはその者たちに頼んでくれ……」

「そういえば、荷物はそれだけか？」

馬車を降りてからここまで、リリアンは小さなカバンを一つを携えただけだった。

この部屋に案内をするにあたり、ユーティがそれを持つと手を伸ばしたのだが、『夫となる方を煩わせたくない』との理由で、リリアンはかたくなに手放していいない。

か弱い貴族の令嬢が持てる程度の大きさだ。大したものが入らないそれについて、不思議そうに問いかけられ、彼女はかすかに赤面した。

「はい。荷物はすでにこちらへ届いていると言わされましたので、身の回りのものだけを……」「そうか」

それ以上は追及されず、ほつとしていたところに、ドアをノックする音が響く。

「失礼いたします。オーラスとクロナ、参りました」

「ああ、待つていた。入つてくれ」

ユーティの言葉に応じて室内に入ってきたのは、黒服を着た男性とメイド服の女性が一人ずつ。

男性の年齢は三十を少し過ぎたあたり、女性のほうはもう少し年嵩だ。

「紹介しよう。君の専属執事となるオーラスと、メイドたちを束ねる予定のクロナだ——オーラス、クロナ。こちらは私の妻となるリリアンだ。よく仕えてやつてくれ」

「かしこまりました。オーラスと申します。よろしくお願ひいたします」

「クロナでございます。何事でも申し付けてくださいませ、若奥様」

「わかつない黒の執事服を着たオーラスが、お辞儀の見本とでも呼びたくなるほどの美しい礼を執る。その隣では、やはり髪の毛を一筋の乱れもなく結い上げたクロナが、軽くスカートをつかんでメイドの礼を見せていた。

「我が家では家族の一人一人に専属の執事がつく。その他に家全体を取り仕切る者もいるが、お互いの連絡は密にさせてるので、オーラスの手に余るような案件でも気にせず相談するといい」

専属のメイドはまだわかるが、まさか執事までつけられるとは思わなかつた。

実家の自分の扱いを思い出し、リリアンは思わず遠い目になる——が、自分の返事を待つてい

ると気が付き、慌てて口を開く。

「リリアンです。あの……オーラスさん、クロナさん。よろしくお願ひします」

「私共に丁寧はお言葉遣いは無用です。オーラス、クロナと呼びつけて、何なりとお申し付けください」

「は、はい」

「そうは言われても、すぐに順応できるとは到底思えない。

リリアンの戸惑いを通り越した困惑を感じ取ったのか、クロナがこの場を仕切り始めた。

「それでは、若奥様にはまず湯浴みとお着替えをしていただきます。坊ちやまとオーラスさんは、退室をお願いします」

「……坊ちやまはやめてくれと言つただろう」

「申し訳ありません、ユーラ様。つい、癖で」

ユーラに苦情を言われ、謝つてはいるが、その口調は少しも申し訳なさそうではない。ユーラのほうもことさら気を悪くした様子もないので、おそらくこれはこの二人の間ではよくあることなのだろう。

そんな軽口の応酬で、リリアンの緊張が少し緩む。

ここでは主と使用人たちの関係がとてもうまくいっているようだ。

それにほつとした。

「では、クロナ。後は頼む」

「お任せくださいませ」

「夕食は呼びに来る。君もそれまで、ゆっくりしてくれ」

「ありがとうございます」

そう言いおいてオーラスと共に、ユーラの姿がドアの向こうに消える。

バタン、という軽い音を立てて扉が閉まり、室内にはリリアンとクロナの二人が残された。

「……さて、若奥様」

「どうぞ、リリアンと呼んでください」

「さようござりますか。では、リリアン様」

そこでいつたん口を閉じたクロナの視線は、先ほどとは異なり鋭い。

上から下まで、しっかりと確認……というよりも、值踏みしているかのようだ。

使用者が主一族に向けるには不躾な眼差しだが、リリアンにはなじみの深いものだつた。そもそも、事前に説明されていたのとは別人が『ユーラの妻』としてやつてきたのだ。

どのようなことを言われるのだろうかと、内心で身構える。

しかし――

「お顔のお色があまりよくありませんね。お屋はお食べになられましたか？」

「え？ い、いえ」

思いがけない質問に、思わず素直に答えてしまう。

リリアンの実家からここまで、馬車で三日と半日かかるため、途中で宿をとりつつの道中だつ

た。宿で食事は出るが、昼は車内で軽いものをかじる程度。それも一日目あたりからは、慣れない馬車の旅に疲労が募るあまり食欲がわからず、今日に至つては緊張のせいで朝から食べ物が喉を通らなかつた。

「それはいけません。先に湯浴みを……と思つておりましたが、それよりも何か召しあがられたほうがよろしくございますね」

「いえ、そんな……お手を煩わせては……」

せつかくのクロナの申し出だが、そこまで気を遣つてもらうのは申し訳なさが先に立つ。空腹には慣れているので、夕食まで我慢するくらいは何でもない。それをどう説明しようかと言葉を探しているうちに、クロナはさつさと手箸を整えてしまつた。

室内に用意されていた茶器で、まずはのどの渇きを潤すためのお茶を淹れてもらう。熟練の手つきについ見惚れているうちに、薫り高い紅茶がサーブされる。一口含むと、想像以上の美味だ。「お腹がお空きでしようが、あまり召しあがられるとお夕食が入らなくなるかもしませんので、軽いものにさせていただきました」

リリアンが紅茶を一杯飲み終えるかどうかという頃に部屋に届けられたのは、三段重ねのティースタンドだつた。小さなサンドイッチやスコーンが見た目も美しく並べられている。

この短時間でよくそこまで……と、驚いているうちに、クロナがさつさとそれらを皿に並べて差し出す。

「あ、ありがとうございます」

「お心はありがたく頂戴いたしますが、これが私の仕事でございますので丁寧なお言葉は不要でございます——私がおりますとお気詰まりかと存じますので、いつたん下がらせていただきます」

本来であれば、メイドというものは主人がお茶を飲み終えるまではサーブにつき、その後もこまごまとした世話をするために室内で控えている。

それをあえて席をはずすというのは、リリアンが緊張しているのを感じ取つたからだろう。どこかそつけない態度ながらも、その気遣いは一流といつていい。

これほど丁重に扱われたことのないリリアンは、ただただ、その言葉に頷くだけだ。

「それではまた、夕食のご準備のために参りますが、それまでの間は、お疲れでございましょうからベッドでお休みください」

そう言いおいて、クロナが退出する。ぱたん、とドアが閉まる音に、リリアンは一つ、小さなため息をついた。

数日前に、父から『姉に代わってラファージュ家に嫁ぐように』と命じられて以来、溜まりに溜まつた心労と緊張が込められたため息は、自分の耳にさえひどく重たく感じる。

父であり侯爵家当主でもある相手から命じられたのだから、リリアンに拒否は許されない。

それでも『あちらにはきちんと理由を説明し、妹が代わりに行くことも知らせる』というその言葉を信じてここまで来たのだが——まさか、それらがすべて行われていなかつたと知つた時には頭が真っ白になつた。

「……お母様……」

自分でも知らぬ間に口からこぼれ出たのは、もうこの世にはいない母の名、だ。

リリアンの母親は、マチス家に近い場所に領地を持つ子爵家の娘だつた。

そのために幼い頃から父とは面識があり、いつしか愛をはぐくむまでになつたそうだ。本人同士は、折を見て自分たちの気持ちを両親間に打ち明けるつもりだつたらしい。

だが、その前に父に縁談が来てしまつた。

相手は格上の公爵家。

その家の令嬢が、どこぞの夜会で父を見てひとめぼれをしたのだ。

リリアンの祖父は語り草になつてゐる戦争の話からもわかるように、武に秀でた偉丈夫いじょうだつたが、その息子である父はそれとは正反対の、物静かで体格もスラリとした美男子だつたのが災いしたらしい。

マチス家もそれなりに権勢を持つ家ではあつたが、相手は王族の血を引く公爵家である。

対してリリアンの母の家は子爵。祖父母たちも二人が思い合つてゐるのはすでに知つており、ひそかにその仲を見守つてくれていたようだが、正式なものとしていなかつたのが徒あたになつた。

貴族の力関係や、この後のマチス家の利益を考えても、非公式な付き合いを理由に、その申し出を断ることはできなかつたという。

結果、父はその令嬢を妻とし、二人の間に長男が生まれたのを機に、結婚後も関係の続いていたリリアンの母を第二夫人として迎えたそつだ。

しかし、正式な夫婦となつても、第一夫人の意向により母が王都の屋敷に住むことは許されなかつた。領地の、しかも本宅ではなく少し離れた場所に小さな別邸を与えられ、リリアンもそこで生まれたのだ。

ただ、それらの確執はリリアンが生まれる前の話であるし、両親はとても仲が良く、父もリリアンをかわいがつてくれた。王都のきらびやかな様子を語られ、そこに自分たちを連れていけないことを詫びられたこともある。もつとも、幼かつたリリアンは見たこともない場所に憧れこそ抱いたものの、のどかな田園地帯での暮らしに不満を覚えたことはなかつた。

——リリアンが十二歳になつた時、母が急激に体調を崩し、それほど間を置かず身籠みまかるまでは。さすがに母を亡くした幼い娘を一人で領地に置いておくことはできず、リリアンは王都の屋敷に迎えられる。

そこで父と共に彼女を待つてゐたのは初めて会う義母と兄、そして自分と同い年の姉、だつた。一目ぼれして強引に縁を結ばせただけあり、義母は父に執着に近い想いを抱いていたらしい。

だが、父の心は別の場所——リリアンの母にあつた。憎い女の娘。目の届かぬところにいるならまだしも目の前にいるリリアンに、当然のことながら義母の怒りはすべて向かつたのだ。

おかげで、リリアンの王都での生活は、控えめに言つてもひどいものだつた。屋敷の片隅の小部屋に押し込められ、侍女や下働きのような扱いを受ける。本当の使用人であれば給金をもらえただろうが、リリアンにはそれすらない。着るものは使用人のおさがりのお仕着せ、食べるのも粗末なものばかりだつた。

そんな状況でもリリアンが耐えられたのは、幼い頃に父から与えられた愛情があつたからだ。

仕事で忙しく、めつたなことでは屋敷に戻つてこない父だったが、それでもたまに帰宅した際には、こつそりとリリアンに会いにきて『すまない』と謝つたりお菓子をくれたりもした。もつとも、それが義母にばれると、更にひどい扱いを受けたのだが。兄はそんな女の争いには興味がなく、リリアンに関わることはなかつたが、姉はその母に同調してか、つらくあたる。

そんな生活が何年も続き……すべてを^{あきら}諦めはじめたリリアンに命じられたのが、『姉の身代わりとして嫁ぐ』こと、だつた。

「お母様……」

小さく、暗く、寒い部屋で、何度もその名を呼んだ。

いつそ、黄泉から自分を迎えてほしいとすら思った。

だが、その望みは叶うことなく、自分は黄泉ではなく、ラファージュ家の屋敷に来てしまつたのだ。

……気が付くと、紅茶がすっかり冷めていた。

目の前の皿には、まだクロナが盛り付けてくれた軽食が手つかずで載つていて。

自分の家では口にしたこともないほど上等な品々に、本当にこれを自分が食べていいのかと躊躇う。

けれど、手を付けなければ、せつかくのクロナの心遣いを無にすることになる。

★ ★ ★

一方ユーラは、リリアンを部屋に案内した後、オーラスを連れて父母のもとに戻つていた。

「リリアン殿は落ち着かれたか？」
「クロナに後を任せできました」

「そう。それなら安心ね」

先ほどリリアンを迎えた部屋ではなく、家族のための談話室だ。すでにソファーに腰かけている両親に一礼し、ユーラは己も近くにあつた椅子に腰を下ろす。

痛みはないが負傷した足はあまり踏ん張りがきかず、ことさらゆつくりとした動作になる。それを痛ましげな目で見られるのにはもう慣れた。

「ですが、ユーラ。貴方の先ほどの態度は、お世辞にも褒められたものではありませんよ？」
最初に口を開いたのは、やはり母だ。

「思うところがあるのはわかりますが、あの方——リリアンさんの責ではないのですから」

「わかつています。それに、俺は一言も彼女を責めてはいませんが？」
「確かにそうでしょうが、それしてもあまりにもそつけない態度ではありませんか」

「正真正銘の初対面ですよ？ 多少、ぎこちなくなつても、そこは大目に見ていただきたいもので

すね」

予想どおりのお小言だが、あいにくユーラークには何も響かない。

その後も続く母の話をのらりくらりと躰していると、やがて業を煮やした様子の父が割り込んできた。

「もう、その話はそれくらいでいいだろう。それで？ ユーラーク。先ほどの言葉は本気か？」

「先ほどの……とは、どのことでしようか？」

「リリアン殿をお前の妻に、ということだ」

「相手が姉から妹になつたとしても、両家の婚姻には変わりないのでから、構いませんでしょう？」俺としても、特に相手に思い入れがあつたわけではありませんので……」

ユーラークと本来の相手——リリアンの姉であるテレーズという令嬢とは、生まれる前からの婚約者で、幼い頃から何度も顔を合わせている。

王都で生活をしている彼女と、領地で過ごすことの多かつた彼が頻繁に会うことはなかつたが、折々に手紙のやり取りもしていたし、互いの誕生日には贈り物もしていた——もつとも、彼女を愛していたか、と問われれば答えは『否』だ。

侯爵家の令嬢ともなれば、気位が高いのは納得できる。が、ユーラークからすると、彼女のそれは少々行きすぎているように思われた。

身に着けているものも華やか、言葉を飾らないなら派手で、質実剛健しつじつこうけんを旨むねとするラファージュ家の家風にはそぐわないと感じたものだ。

それでも貴族としては親——この場合は祖父が決めた相手と添そうのは義務だし、結婚したならお互いが歩み寄ればいいと考えていた。縁あつて夫婦になるのだから、彼女を尊重し、慈しむつもりでもいた。

なのに、ユーラークのその気持ちをあつさりと裏切つたのはテレーズのほうだ。

一言の断りもなく、手紙さえよこさず、己の代わりに妹を差し出してきた『元婚約者』。体に障りができた、とリリアンは言つていたが、それがどんなものか説明はない。いや、おそらくは説明できないような理由なのだろうことは、ユーラークも両親もうすうす察している。ならば、取り繕う必要はない。

捨て鉢とも少し違うが、そんなユーラークの心の内を察したのか、父である辺境伯が語り始めた。

「……リリアン殿は、第二夫人の子だ」

「そうですか。私は初耳ですが、それが何か？」

テレーズから家族の話を多少聞いてはいたが、妹がいるというのはその本人が現れて初めて知つた。第二夫人の子——つまりテレーズとは腹違いということか。あまり口に出したくなかったのかかもしれない。

第二、あるいは第三の夫人を娶めとる貴族は決して珍しくなく、一夫一婦を守つてゐる両親のほうが少数派である。だが母親同士に確執があれば、子供たちが仲良く育つというのも難しかろう。しかし、ユーラークにとつてそんな話はよく聞くものでしかない。

「レオポルドは……お前の岳父かくふになる男は、昔、好いた女性がいた。だが、家同士の事情で今の第

一夫人と結婚することになったのだ。それからしばらくして、件の女性を第二夫人に迎えたと聞いた

マチス家とラファージュ家の祖父同士は親友とも呼べる間柄だつたと聞いていた。その子である父と今のは侯爵家当主もそれなりに面識はある。だからこそ、そんな内々の事情を知つているのだろうが、今のユーラにとつては『それが何か?』としか感じられない。

「貴方……」

「噛み合わない親子の会話を見かねてか、母が父に低く声をかける。

「……そうだな。この話はまたにしよう。それよりも、お前が是というのなら、明日には式を挙げるぞ? 構わん?」

「はい」

いつたい何度確認するのか。

父親に向かい『しつこい』とは口に出せないものの、それが顔に出ていたのかもしれない。

「ならばいい。お前もいろいろと用意があるだろう、戻つて構わんぞ」

「はい。それでは失礼します、父上、母上」

やつと退出を許され、ユーラはほつとすると。

騎士団員であちこちに派遣されることの多かつた自分は、領地の管理や王都での仕事に忙しい父と、こうしてたまに顔を合わせて話をするのが楽しみだった。

それなのに、いつからだろうか?

このような会話が煩わしい、と感じるようになつたのは、ドアに向かい歩く間も、移動に合わせてコツリコツリと杖の先端が床を打つ音がし、それで思い出す。

こうやつて、ユーラが歩むのに杖が必要になつてからだ。

思わず自嘲の笑みが浮かび——両親に背を向けていたことに感謝した。

入り口の近くで待機していたオーラスにドアを開けられ、部屋から出たところでクロナとすれ違う。

彼女はリリアンの様子を報告しに来たのだろう。

明日より妻となる女性のことだ。本来であればユーラもその報告を聞かねばならない。

しかし、いつたん出てきた部屋に戻る気にはどうしてもなれず、わずかに後ろ髪をひかれる思いを振り切り、歩を進めたのだった。

リリアンとユーラーの婚姻の日は、朝からどんよりとした灰色の雲が立ち込めていた。辺境伯家と侯爵家——双方共に高位貴族の家同士の婚姻の場合、王都の大聖堂で盛大に行われるのが慣例だ。

しかし、表向きは平和となつても、いまだ前の戦の爪痕は残つており、辺境伯領では滅びた北国の残党による襲撃が続いていた。

そんな状態で当主とその跡取りが長く領地を空けるのは危険すぎる。その他にもいろいろと事情があり、今回の場合は領地で家族と近い者たちだけで式を挙げ、後ほど、お披露目のための宴を催す手筈となつていた。

午後の一刻をまわり、祭壇の前では、ユーラーが父親と共に花嫁の入場を待っていた。

花嫁らしく威儀を正した衣装に身を包んではいるが、髪はなでつけず、いつものように片方だけ顔を隠すように下ろしている。その前髪の下で、傷のある左目が皮肉げな光を放つ。

もうすぐ式の始まる時間だが、館に隣接した礼拝堂に居並ぶ面々は、すべて辺境伯家縁の者たちばかりだ。

「それにしても……侯爵殿は後始末で王都を離れられず、夫人は体を壊した姉に付き添うために出席できないですか」

昼前に曇天からぼつぼつと雨が降り始め、正午を過ぎる頃には土砂降りとなつていた。

ラファージュ家側の参列者は昼前にはそろつてはいる。到着の遅いマチス家側の心配をしていた母は、さぞや拍子抜けしたことだろう。

「だとしても、まさか親族一人も来ないとは……おかしな話だが、この有様では王都で式を行わなくて良かつたのかもしれないな」

マチス家には長男もいるはずなのだが、当然のようにその姿もなく、家族が無理なら近い親戚が来るべきなのにそれも見当たらない。

式への参列は義務ではないとはいえ、仮にも娘を嫁がせる相手にとる態度ではないし、何よりもこれはラファージュ家を侮辱する行為でもあった。

ちなみに、ここまでリリアンを送つてきたのは、馬車の御者おとしやの他は護衛を兼ねた小者が一人だけで、その者たちも、彼女がラファージュ家の門をくぐるのを見届けた後、さつさと戻つていつたらしい。

御者おとしやはともかく、護衛とは名ばかりで、もしかすると途中でリリアンが逃げ出さないように見張るための監視役だつたのかもしれない。

「さすがにあちらでは人目もあるでしょうから、こんな真似はできなかつたと思ひますよ」

「それは……確かにそうかもしだれん」

ユーラグのセリフは、マチス家にとつてラファージュ家への配慮は土都の人目よりも優先度が低いと言つているも同然だつたが、残念なことにそれに反論する根拠はない。

「祖父の代からの親友だつたそうですが、その関係もどうやらこれで終わりのようですね」

「もう……」

ユーラグとしてはこの光景に感慨はないが、それなりにマチスの現当主と親しかつた父は少なからずショックを受けている様子だ。

「……まあ、どうでもいいことです。代が替われば付き合い方も変わるということでしよう」

親友同士の家が、それよりも濃い関係になるための婚姻だつたはずなのに、反対の結果になつたらしい。

参列者たちもこの異常事態に気が付いているようで、あちこちでひそひそと小声で何事か話し合つており、到底、今からめでたい婚姻の式が始まるムードではない。

それを止める気にもなれず、ユーラグは黙つて花嫁の入場を待つていた。

そして、それからほどなくして――

「――ご静粛に！ 花嫁の入場です」

先づれに続いて、式場となつてゐる礼拝堂の扉があく。

そこから入つてきたのは、本日のもう一人の主役であるリリアンだ。

彼女に付き添つているのは、ユーラグの母親。普通は新婦側の親族の誰かがやるべきだが一人もいないために、その役目を姑となる彼女が買つて出たらしい。

その母親に手を引かれ、しづしづとした足取りでリリアンがユーラグの待つ祭壇に近づいてくる。それは、ほぼ丸一日ぶりの再会だ。

昨日は夕食を共に取る予定だつたが、長旅の疲れがあるということで、リリアンは自室となつた場所で一人で済ませていた。

今朝も早朝から準備のために、クロナたち侍女と共に部屋に籠りきりで、両親に言われたユーラグが様子を見に行つた時も扉の前で追い返される。そのため、式の前には彼女に会えなかつた。

昨日ぶり――そして、二度目に見るリリアンは、白を基調としたドレスに身を包んでいる。この国では、婚姻の折に夫となる相手を象徴する色――髪や目の色にちなんだドレスをまとうのが一般的だが、あいにくとユーラグは黒髪黒目であり、さすがにそれは避けたのだろう。

その代わりに、ほとんど黒に近い紫の差し色が随所にちりばめられており、それがドレスのデザインも相まって華奢な彼女の体形を引き立てている。

銀色の髪は美しく結い上げられ、昨日見た時よりもその輝きを増しているように思えた。

首と耳元を飾る宝飾品は、リリアンの水色の瞳と同じ色の石が使われているが、ユーラグの記憶が間違いでなければ、代々、ラファージュ家に伝わつていたもののはずだ。

リリアンが勝手に使えるものではないため、彼女にそれをつけさせたのは母だと思われる。ユーラグの母に付き添われた彼女が近づいてくるにつれ、化粧のせいもあるだろうが、昨日よりもかなりその顔色が良くなつてゐることに気が付いた。

要するに、ユーラグはリリアンが登場したとたんに彼女から目が離せなくなり、目の前で立ち止ま

られた時も、控えめな父の咳払いでやつと自分がこれから何をしなければならないかを思い出す始末だった。

どこかぎこちない動きでそつと右手を差し出すと、リリアンの手が付き添いの母からユーラーへと渡される。

その際に、母親の目がわざかに笑っているように思えたが、それよりも自分の手に触れるリリアンの指の感触^{きかせ}に気をとられた。

——細く、華奢^{きやしや}な手。

貴族の令嬢の常で柔らかく滑らかな手触りを予想していたのだが、己の手のひらに乗せられたそれが、ほんの少しだけカサついているように思えるのは気のせい……ではなさそうだ。

ちらりと視線を落とすと、長く美しく整えられていて当然の爪も、短く切られている。

まるで下働きをしている者みたいに。

だが、仮にも彼女は侯爵家の令嬢である。そんなことがあるはずもなく、けれども、そうであればなぜこのような……

またしても思考が横にそれそうになるのを、ユーラーは慌てて修正した。

とにかく今は、『式』を済ませるのが最優先事項だ。

リリアンの手を取つたまま、ゆっくりと祭壇^{さいけん}に向き直る。

式の最中は移動しないのがわかつていたので、この場所に着いてからは杖^{つえ}を使用人に預けていた。バランスを崩さぬように慎重に体の向きを変えると、隣のリリアンが気遣わしげな視線を向けてい

るのに気が付く。

『同情は必要としていない』

とつさにそんな言葉が出そうになり、ぎりぎりのところで唇をかんでこらえた。

婚姻の式で花嫁^{はなむこ}が口にするセリフではないし、この類の視線ならすでにおなじみとなつていたはずだ。

なのになぜ今、これほどまでに気に障るのか……訳のわからぬいら立ちを懸命に抑えようとするがうまくいかない。

ユーラーがなんとか平静を取り戻した時には、式は始まっているどころか、両者の署名の段階まで進んでいた。

★ ★ ★

「——それでは、婚姻誓約書に署名を」

領都の神殿から派遣してきたという神官に促^{うなが}されたユーラーが先にそれに署名するのを眺めながら、リリアンは内心でこつそりと安堵^{あんば}のため息をついた。

なんとか無事にここまでたどり着けたが、ここに至るまでのあれやこれやは本当に大変だったのだ……

昨日、クロナから夕食までの時間で休むように言われた後。

旅の埃にまみれた姿できれいに整えられたベッドを使うのは憚られたものの、積もり積もつた疲労には勝てず、リリアンは倒れ込むようにしてそこに横たわった。

眠るつもりはなく、ただ目を閉じて体を休めるだけ……だったはずが、クロナがやつてきてそつと体に触れられるまでの記憶が飛んでいた。リリアンは初めての婚家でいぎたなく眠り込んでしまっていたことに青くなつた。

もつとも、クロナはそんなリリアンに苦言を呈することなく、湯浴みの用意ができてることを告げる。久しぶりに温かいお湯に浸かつた、そこまでは、まだ良かったのだ。

浴室から彼女が出てくるまで（湯浴みの手伝いはリリアンが断つた）の間に夕食のための衣装を準備してくれていたクロナが、いざ、それを着せつけようとして、重大な問題点があることに気が付く。

サイズが、全く合わないのである。

考えてみれば、当たり前の話だ。用意されていた衣装は、すべて本来の結婚相手——テレーズに合わせてしつらえられたものばかり。

リリアンがテレーズと似た体形をしていたのならなんとかなつたのかもしれないが、小柄で胸や腰が豊かだった姉とは異なり、リリアンは華奢きやしやではあるがテレーズよりも身長が高い。

クローゼットには大量のドレスが収納されており、試しにと何着かにそでを通してみたものの、人前に出られる状態には程遠かつた。

「……困りましたね」

「申し訳ありません」

「いえ。私どもの落ち度でございますので」

「いいえっ！ 私がいきなりこちらに来てしまつたせいですから」

とはいえ、いつまでも裸でいるわけにもいかない。からうじて部屋着たぐいの類はなんとかなりそうだったので、それを着てはいるが、そんな姿で夕食の席には出られないのは明白だ。

あとは、ここに着てきた服しかないのだが、それを提案したリリアンに対し、クロナがきつぱりと拒絶した。

「あのような服は、ラファージュ家の若奥様となられる方にふさわしくございません。ひとまず、お夕食はリリアン様のご体調がすぐれないためにお部屋でとられる、ということにいたしますよ。それより、問題なのは明日でございますよ」

婚姻式のためのドレスも用意されているが、そちらも当然ながらテレーズに合わせて仕立てられている。

「お式のためのドレスと、その後の晩餐ばんさんのものと……とりあえずは、その二着ですね」

そう言いつつ、隣接する部屋からクロナが持ち出したのはトルソーに着せかけられた二着のドレスだつた。無論、そのトルソーもテレーズの体形に合わせたものである。

「リリアン様のお体に合わせたものをすぐに用意いたしますが、今はご容赦ようしゃくださいませ」

「いえ、そんなお手間は……」

「今後、絶対に必要になるものでございます——リリアン様、僭越ながら一つ、申し上げてもよろ

しいでしょうか？」

「は、はい」

微妙に変わったクロナの口調に、リリアンは反射的に背筋を伸ばす。とはいっても、元から立ち姿勢はとても美しい。

「リリアン様がご実家で、どのようにお過ごしになられていたとしても、これよりはラファージュ家の次期当主の妻、ゆくゆくは領主夫人となられるお立場となられました。どうか、そのご自覚をお持ちくださいますようお願い申し上げます」

「はい」

「リリアン様の恥は辺境伯家の恥となります。お衣装はそのために最低限必要なものであり、それをご不自由なくご用意させていただくのは私どもの責務です。ですので、お衣装がリリアン様のお体に合わなかつたことをお詫びするのは私どもでございます。どうかそれ以上のお言葉はご無用にお願いいたします」

「え……でも、それは……」

どう考へても、悪いのは直前になつて花嫁を入れ替えたマチス侯爵家のほうだ。それらをクロナたちの責と言われても、リリアンは納得できない。

けれど――

「ご領主様より、『リリアン様にお仕えせよ』と命じられておりますれば、貴女様が私のお仕えする方です。以前、どこのどなたとも存ぜぬ方が、あれやこれやとお命じになられていた気もいたし

ますが、きっと私の記憶違いでございましょう」

どうやら、テレーズのことはなかつたことに対する――いや、なつた、らしい。

「使用者の身で、失礼なことを申し上げました。重ねてお詫びいたします」

「い、いえ！ そんな……ありがとう」

これ以上詫びるな、と言われたからには、感謝を伝えることしかできない。

そんなリリアンに、クロナは小さく微笑んだ後、早速、次の行動に移る。

「それでは、お夕食をこちらに運ばせますので、それを待つ間に、まずはこちらのドレスを着てみてくださいませ」

リリアンに合わせたトルソーがない以上、本人が着て補正するしかない。

「針仕事の得意なメイドが何人かおります。その者たちを動員すれば、明日の朝までにはなんとかなるでしよう」

徹夜確定になるが、この場合、それ以外に方法がないのはリリアンにもわかつた。

「あの……」

「詫びはご不要ですが、ねぎらいのお言葉はありがたく頂戴いたします」

何か言いたいのに何と言つていいのか迷うと、クロナが助け舟を出してくれる。

「いらぬ手間をかけさせて、その……頑張つてくれてありがとうございます、と伝えてください」

「確かに、そのように伝えましょ」

その後、サイズの合わないドレスをいかにしてリリアンの体形に合わせるか、ついでに装飾過多

であり彼女の持つ雰囲気に合わない部分をどう変えるか、が話し合われる。

急遽、呼び集められたメイドたちは最初こそ迷惑な顔をしていたが、クロナが主となつての意見交換会をしているうちに、いつの間にか熱心にその会話に加わっていた。

「あの……私も、何か……」

針仕事なら、自分にも手伝えることがあるのではないか、と。そう思つたリリアンだが、クロナの迫力のある笑顔に、言い終えることができなくなる。

「リリアン様は、ゆっくりとお休みいたたくことがご自分の役目とお心得ください」

そして、ここで作業をしてはリリアンが休めないからと、メイドたちをドレスと共に下がらせ、運ばれてきた夕食をとらせ……と、まるで彼女がリリアンの母親のように甲斐甲斐しく世話を焼いてくれたのだった。

そしてその翌日、つまりは今朝。

緊張で食べ物が喉を通らないリリアンを説き伏せあやして食事をさせ、つま先から髪の毛の先に至るまで磨き上げ、途中のこのこと顔を出したユーテをあつさりとあしらつて追い返し、目を赤くしたメイドたちから見事に仕上がつたドレスを受け取り、辺境伯夫人からの指示でリリアンが見えたことも触れたこともないような豪奢な宝飾品で身支度をしてくれた。

「とてもお美しゅうござりますよ、リリアン様」

クロナの言葉どおり、大きな姿見に映る自分は、これまで見た中で一番美しい。

「何から何まで……本当にありがとうございます」

望まれて来たわけでも、望んで来たわけでもないリリアンだ。

いきさつを考えれば、どれほど冷遇されても文句は言えない。それを、主に命じられたとはいってここまで献身的になつてくれる相手に、そんな言葉だけでは到底足りない。それでもせめて、心からの礼を告げる。

「うつむくことなく、胸を張つてお進みくださいませ」

「ええ」

なぜここまでしてくれのか……使用人としての建前ではなく、クロナの本心を知りたいと思うながらも、気持ちを切り替える。

今から向き合うべきなのは、クロナではない。

「それでは、ご案内させていただきます」

別室で待機してくれていたらしいオーラスに付き添われ、はき慣れない高いヒールの靴に少々手こずりながらも、リリアンは背筋を伸ばし歩を進める。

礼拝堂の前まで来た時に、すでに姑となる辺境伯夫人が自分を待つてくれていたのに驚きながら、笑顔と共に差し出された手に、そつと自分の左手を添えた。

「ありがとうございます、あの……お義母様」

「どういたしまして。私も貴女みたいな義娘がてきてうれしいのよ」

言葉の一部を妙に強調された気がするが、その理由を尋ねて良いのか迷つてているうちに、先づが声を張り上げた。

「ご静肅に！ 花嫁の入場です」

分厚く大きな扉がゆっくりと引き開けられる。

その先の向かって右側に固まつてラファージュ家に縁があるであろう人々が並び、最奥の祭壇前にはユーグとその父である辺境伯が立つていた。

その他は、この式のために来てくれたという司祭が一人だけ。左側のマチス家関係者のための場所に参加者の姿はない。

あまりにも失礼……を通り越して無礼ですらある。

一斉にリリアンを見つめる人々の目に敵愾心とでも呼べそうなものが宿っているのは、当たり前だろう。

——覚悟はしていた。

それでもお世辞にも友好的とは言えない大勢の視線に、思わずうつむきそうになる。

けれど、その寸前に、預けていた片手をきつく握り締められた。

リリアンたちが礼拝堂に足を踏み入れた時点で、すでに式は始まつており、ここから先に口を開いていいのは司祭と新郎新婦のみ。

それゆえの無言での力づけにリリアンは頭を高く上げる。それでいい、とでもいうようにもう一度、姫の手に力が入つた。

しん……と静まり返つた礼拝堂に、リリアンたちの歩むヒールの音と、長く裾を引いたドレスの衣擦れ、そして降りしきる雨の音だけが響く。その中をゆっくりと進み、やがて、ユーグの待つ場

所へたどり着いた。

無言のまま、姫に預けていた手がユーグへと引き渡される。

今日の彼は杖を手にしていなかつた。

顔に残る傷、不自由となつた左足。

昨日聞いたユーグの言葉によれば、服に隠された部分にも傷があるという。

だが、その原因をリリアンは知らない。

本物の婚約者であるテレーズなら知つてているのかもしれないが、それをリリアンに教えてくれるような親切心は欠片もなかつただろう。

それでも、理由を知らずとも、今のユーグを心配することはできる。

支えとなる杖なしに、慎重に祭壇に向き直る彼が、万が一にもそのバランスを崩さぬよう、もしそうなつた場合はすぐに支えられるよう。注意深くその動きを見守り、無事に方向転換を終えたことにはつとして、思わず彼の顔を見上げ……昨日と同様、片方だけおろした前髪の下の、ひどくイラついたような視線とぶつかつた。

（……え？）

ここまで一言もしやべらず、ただ歩いてきただけだ。ユーグの気に障るような真似はしたくてもできないはずだつた。なのに、そんな視線を向けられる意味がわからない。

だが、その視線はすぐに逸らされ、その直後から司祭の説教が始まつたせいで、リリアンは式に集中するしかなくなる。

そのまま式は進み、誓約書へ署名をうながされた。一瞬、ユーラがそれを拒むかもしれないと思つたものの、彼が素直にペンをとつてくれたので安堵する。

さらさらと自分の名をそこに記した後、ユーラは同じペンをリリアンに渡す。

リリアン・レナ・マチス。

この署名をするのは、これで最後だ。今日この時より、リリアンの家名はラファージュとなる。

けれど……いつまで自分は、この『名』を名乗れるのだろうか？

ふと、そんな疑問が頭に浮かぶが、間違つても婚姻式の最中に考えることではない。余計な考え方を振り切るように、そつと署名を終えた書類を差し出した。

司祭がそれを確認する。

「滞りなく両名の署名をいただきました。これより、ユーラとリリアンは夫婦となります。もし、この結びつきに異論のあられる方は、今、ご発言ください」

型通りの宣言に、声を上げる者は一人もなく——こうして、リリアンはユーラの妻となつたのだった。

式の後はお決まりの宴会だ。正式な披露宴はまた別に開催する予定のため、内輪での小ぢんまりとしたものではあつたが、そこは辺境伯家である。贅を尽くしたとまではいかずとも、テーブルには十分に豪華な料理が並んでいた。

内輪だけの宴の場合は立食が多いのに、ユーラの体のこともあつてか着席方式で、これはリリアンにとつて大変にありがたい。

厳かな式の間は口をつぐんでいられても、酒が入れば別となるからだ。

しかし、一段高くしつらえられた席でユーラの隣に座り、その脇で辺境伯夫妻がにらみを利かせていれば、酒で過剰に滑らかになつた舌にも歯止めがかかる。

よほどの愚か者でない限りは、この場でリリアンを侮辱するような真似はできないだろう。

あからさまではなく、それとなくにおわせる類の嫌みまで完全に封じることはできなかつたが、その程度であればリリアンも聞き流すことができた。

やがて——

「さて、と……そろそろ新婚の二人を解放してやらねばならん」

宴もたけなわになつた頃に告げられた辺境伯の言葉で、ユーラとリリアンが退出する。

その先は、言うまでもなく夫婦の寝室であつた。

急ごしらえの、けれど見事に仕上がつたりリアンの披露宴用のドレスだつたが、寝室にはふさわしくなかつた。

いつたん、一人で戻つた自室ではクロナや侍女たちが待ち構えており、すぐさま浴室に送られた後、朝の婚姻式の時と同じように、いや、それ以上に念入りに全身を磨き上げられ、衣装を着せかけられる。

これほど薄く、扇情的でさらあるものを身に着けるのは初めてだ。周囲にいるのは同性だけだ

というのに、今すぐ着替えたくなつたリリアンだが、これが『初夜の装い』であると言わればそれまでだ。

湯浴み後の体が冷えてはいけないとガウンだけは羽織らせてもらえたものの、こちらも素材は夜着本体と同じであり、本当に防寒の効果があるのかははなはだ疑わしかつた。

その姿で、おろしたままの髪をくしけずられ、薄く夜の化粧を済ませて向かつた先は、リリアンが気が付いていなかつた部屋の片隅にある扉の前——その向こうが夫婦の寝室であるという。

そう告げられた瞬間、本当に今更であるが、自分が『誰かの妻』になるという実感が怒涛のようになりリリアンに押し寄せる。

普通であればもつと前に感じるものだろうが、婚姻式では醜態をさらさないようにして頭がいっぱい、何より『嫁げ』と告げられたのが数日前のことなのだから、無理もない。

怖気づき……けれど、ここから逃げ出すわけにもいかず、覚悟して扉を開いた。その先はここよりもやや広めの部屋だ。

中央に大きな天蓋付きのベッドがあり、すでにユーティがそこに腰を下ろして彼女を待つていた。

「あの……お待たせして申し訳ありません……」

どうしても声が震えてしまうのは、これから初夜を——それも、昨日初めて会つた相手と迎えねばならないせいだ。

薄い絹とレースで作られた初夜のための衣装は、リリアンの華奢な体格を余すところなく新郎の前にさらけ出している。

恥ずかしくて仕方がないが、下手に隠すのも憚られる。

室内を照らす明かりが寝室にふさわしく光量を抑えたものであるのが、リリアンには唯一ともいえる救いだつた。

「それほど待つてはいない。それと、女性の支度に時間がかかるのはわかっているから、謝罪は無用だ」

相も変わらずそつけない物言いだが、婚姻式で垣間見せた敵意のようなものは感じられない。

そのことでわずかにほつとすると、この先、どう動けばいいのかがリリアンにはわからなかつた。座つているユーティのところまで行くべきなのかもしれないが、呼ばれてもいいのに勝手に動いてもまずい気がする。

そのリリアンの逡巡を感じ取つたのか、それとも単にそういうタイミングだつたのか——

『そこで立つていても仕方ないだろう？ 本来なら立つて出迎えるべきだろうが、立ち上がるのに少々難儀するので、君がこちらに来てくれる助かる』

受け取り方によつては、『リリアンのためにわざわざ立ち上がるのが面倒だから、勝手に歩いてこちらに来い』と言われていると解釈できるセリフである。そして、本人は気が付いていないのか

かもしれないが、おそらくそれがユーティの本音だろう。

リリアンとしては粗雑な扱いに憤つていい場面だが、残念なことに彼女はこうした扱いに慣れすぎていた。

素直にその言葉に従つておずおずと足を進め、ユーティに近づく。彼はベッドに腰かけた自分の隣

をポンポンと叩いて示した。

そこに座れ、ということだろうが、リリアンとしてはその距離がいささか近すぎるようと思われ、結局少し離れたところにそつと腰を下ろす。

「……まあ、仕方がないな」

手を伸ばせば触ることはできても肩を抱くような親密な行動はとりずらい距離に、ユーティが苦笑する。

「も、申し訳ありません」

責めているわけじゃない。男の俺に、女性である君の気持ちがわかるとは言えないが、想像はつく」

相変わらずぶっきらぼうな物言いだが、確かに彼自身の言うように怒ってはいないようだ。

そのことに勇気づけられ、リリアンはおろしていた視線を思い切って上げ、ユーティに向き直った。

お互いの距離が近いため、薄暗い照明の中でも、その秀麗な美貌が見える。

昨日、初めて会った時も思ったが、彼は本当に整った顔立ちをしていた。

軽くウエーブのついたしなやかで艶のある黒髪に、黒曜石の輝きを宿した瞳。絶妙なカーブを描く顔の輪郭に、すっと伸びた鼻梁の下には形の良い唇。整いすぎるほどに整っているのに、そこに女性的な弱々しさはない。

男らしく逞しい首筋から下は着衣の上からでもわかるがつしりとした肩幅で、しつかりと鍛えられていることが察せられた。

そんな、おそらくは多くの女性たちにもてはやされていただろうユーティが、こんな自分を見てどう感じるだろう？ 姉のテレーズは小柄で、とても女性らしい体つきをしていた。その彼女に代わって押し付けられたのが、身長ばかりが伸びてやせっぽつちな、女らしい魅力などないに等しいこんな自分では……

そう思うと、知らぬ間にまたうつむいてしまう。

「やはり気味が悪いか？」

「え？」

その時、ユーティからかけられた言葉は、リリアンには全く理解できなかつた。

驚いて、再度顔を上げ、彼の顔をまじまじと見る。

「この傷が気に入らんのだろう？」

視線の先でユーティが指で示したのは、自分の左目を縦断するように残る傷跡だ。

秀麗な顔立ちにつけられた無残な傷——だが、確かに目立ちはするが、気味が悪いとは思わない。

「いえ、そうでは……」

「ここでは俺と君の二人きりだ。取り繕う必要はない」

「いえ。気味が悪いとは思いません」

「正直に言つてくれて構わん」

「本当に、そう思つております」

「本音を話してくれても怒らないと誓う」

「本当に本当です」

話にならない。というか、いくらリリアンが本当のことを言つても、ユーテには彼女の言葉を素直に受け入れる気がないようだ。

あまりにもかたくななその様子を不思議に思い、更にはなぜかこのまま流してはいけないように感じたリリアンは、ここで少し話の向きを変えることにした。

「本当に気味が悪いなどとは思つておりません。ただ……」

「何だ？ 言いたいことがあれば遠慮なく口にしてくれ。ああ、傷を負う前も負つてからも、陰口の類は聞き飽きるほど聞いてきたので、多少のことで腹は立てない。安心するといい」

傷さえなければ——いや、あつたとしても、そこらの令嬢よりもよほど整つた容姿の持ち主だ。しかも、国内でも大きな力を持つ辺境伯の嫡子である。嫉妬ややつかみの視線も数多く集めてきただろうことが、その言葉からうかがえた。

「ありがとうございます。では、不躾ながらお尋ねします。その左のお目は、視えていらっしゃるのですか？」

「……これはまた、意外な質問だな。聞かれるのはこの傷の理由かと思つたが、知つていたのか」リリアンの質問はユーテの意表を突いたらしい。

「いいえ。存じません。ですが、ユーテ様は騎士であられると伺つておりましたので、お仕事中の出来事であろう、と……」

辺境伯の嫡子で、王立騎士団に所属する騎士。リリアンが知るユーテの情報はそれだけだ。

仮にも姉の婚約者であつたのだから、普通であれば家族の語らいの中でもつと詳しく知つているのが当たり前のだろうが、あいにくリリアンの環境は『普通』とは言い難かつた。

唯一、愛情を与えてくれていた父も家にめつたに帰つてこないので、彼女の状況を失念していたのだろう。

「いきなり妙なことをお尋ねしてしまい、申し訳ありません」

傷の理由も確かに知りたいが、ここまでユーテを見る限りではあまり口に出したくなさそうな気配を感じていた。

リリアンは生い立ちのせいで人の顔色をうかがうのが癖になつてゐる。夫となつた相手とはいえ、まだろくに言葉を交わしたことのないユーテにそれを尋ねないほうがいい、と彼女の本能が教えてくれた。

「ただ、それでも、できることなら早めに告げておきたいことがある。」

「いや、いい。なんでも、と言つたのは俺だからな……ああ、視えている。ありがたいことに、この部分の傷は皮一枚だつた」

「でしたら。どうか、髪をおろされるのはおやめください」

「……は？」

リリアンの言葉が更に予想外だつたのだろう。思わず間抜けな声を出すユーテには構わず、彼女は先を続けた。

「せつかくご無事でしたのに、髪をおろされたままでは、そのうち、お目が悪くなつてしまします。」

それだけではなく、片目だけ視力が下がれば、もう片方の目に負担がかかり、そちらも悪くなつてしまふかもしれません」

最初に見た時から気になつていたのだ。

自分などが口を出していいことか迷つていたが、先ほどからの堂々^{どうどくめい}巡りのやり取りもあり、いつそ、今ここで言つたほうがいいだろうと判断した。

「……気になるのは、俺の目の見え方か？」

「負われた時には、さぞや痛まれたかと思ひますが、もう完治していらつしやる様子ですし……もしや、風にあたると痛まれるのでしようか？」 でしたら、余計な差し出口をきいたこと、お詫び申し上げます」

「いや、痛みは全くない。そうではなく、この傷が……いや、そもそも、そんなことをどうして知つている？」

「私の実家の領地でも、傷を負つた者がたくさんおりましたので」

「……ああ」

戦^{いくさ}があつたのは二十年以上前だが、その時の負傷者でまだ生き残つてゐる者は大勢いる。王家や領主から見舞金は出たものの、以前のようには稼げなくなつた者たちを、リリアンの母は自分の住む別邸に雇い入れていた。

片手のない者、片足のない者。健常者よりもできることが限られる彼らに、可能な仕事を割り振り、雇いきれない者たちにもできる限りの便宜を図つていていたのだ。

彼らの中に、ユーレグのよう^に顔面に傷を負つた者もいた。

彼は弓が上手な腕のいい狩人^{かりうど}で、その腕を見込まれて徵兵された。その後、この辺境伯家への援軍に組み込まれ、北国軍の放つた火矢により片腕と顔にひどい火傷^{やけど}をしたのだそうだ。幸い、命に別条^{やけど}はなかつたものの、その火傷^{やけど}のせいで前のように弓がひけなくなり、生活の^{すべ}術^{すべ}を失つて困窮^{こんきゅう}していたところをリリアンの母が救い上げた。

下男^{げなん}として働いてもらつていた彼は、顔の火傷^{やけど}を氣にして髪でその傷を隠した状態にしていたところ、ある日、己の視力がとてつもなく下がつてゐることに気が付く。

弓を得意とするだけあり、遠くまでよく見える目を持つていたのに、だ。

「……母も心配して、お医者様に診ていただいたところ、おそらくはその髪型のせいではないか、と言わされたそうです」

前髪をおろし続けていれば、目は無意識にそこに焦点を合わせようとする。あまりにも近い場所を見つめ続けることで目に負担がかかり、蓄積^{ちくせき}した疲労が視力を低下させたのではないか、と。

彼の場合は、加齢のせいもあつたかもしれないが、そんな実例を知るリリアンだからこそ、ユーレグに告げなければならぬと考へたのだ。

「……そういうこともあるのだな」

彼女の説明を受け、ユーレグは何か考へ込んでいたが、すぐに前髪を上げる様子はない。リリアンとしても、本人にその気がないのに無理にそうさせるわけにもいかず、しばらくは双方が黙つたまま、なんとも微妙なムードになる。